『万葉集』における人麻呂歌集歌の「訓み」と〈訓み〉

――「無乏」の表現に学んだ歌々をめぐって――

松田　浩

一　はじめに

二〇一四年度の古代文学会の総合テーマ「〈音〉を書く」の趣旨説明文は、〈音〉という術語を、以下のように定義している。

音声で伝承されていた歌や詞章を文字に書いて書物を作る。また書物から音声を生み出す。この音声と書物との双方向の関係を、〈音〉という問題設定でとらえてみたらどうだろうか。

右の定義によれば、〈音〉とは、音声言語と書記言語との往還運動の中に捉えられるものということになろう。本稿では、これを承けつつ『万葉集』という書物の中で〈音〉の問題の一端を考えてみることとしたい。

『万葉集』には文字（漢字）によって歌が記されている。そして歌として書記されたそれらの文字列を訓むこと、すなわち文字に即してそれらを解釈することによって、五・七の韻律を持った歌の言葉のかたちが現前することとなる。ここに現れる言葉のかたちは、それを音韻連鎖の上で捉えるならば、趣旨説明文でいうところの「書物から音声を生み出す」という行為に相当しよう。それは総合テーマの掲げる書物と音声との双方向性を捉えようとする〈音〉の一側面でしかないが、訓むという行為の中で生み出された言葉は、更に書記されることによってテキストの文字列の上に現象する。であれば、万葉集のテキストの上でも解釈によって現れることばのかたちの問題として〈音〉を把握することも可能となろう。

ただし、文字の歌に対する解釈行為の中では、必ずしも歌を訓読した結果として得られる三十一文字からなる言葉（「訓み」として実現される言葉）だけが生み出されるのではなく、「訓み」の言葉としては現れずに、歌の解釈に参与する言葉もまた生み出される。このような言葉を生み出す解釈（訓み）を本稿では〈訓み〉と呼んで論を進めることとする。そしてそれこそが、書記言語としての歌と、それを訓んだ際に現れる歌の姿との差異を作り出すものとなる。そしてその〈訓み〉と「訓み」との関係を問うことが、〈音〉の問題を考える手がかりともなろう。

こうした問題意識のもとで、本稿では「柿本朝臣人麻呂歌集」に記された歌の文字列を、これを享受した人々がいかに訓み（解釈し）、そしてそれを承けつつ如何なる歌が作られ、それが書

記されたのかという問題を、特に人麻呂歌集の特徴的な用字である「無乏」におけるそれに焦点を当て、『万葉集』というテキストの中で考えてみることとしたい。

人麻呂歌集を対象とするのは、周知の通り「人麻呂歌集」の書記には通常の『万葉集』における訓字主体表記の歌々のそれとは一線を画す特殊な文字遣いが散見し、そうした特殊な文字遣いを訓む行為の中にこそ〈訓み〉の問題が先鋭的に現われるためである。そして、その中でも「無乏」に焦点を当てるのは、第一に、これが〈非対応訓〉と呼ばれる人麻呂歌集特有の用字であり（稲岡耕二・一九八九）、文字の歌としての性質を捉えるに相応しいものであること、第二に、人麻呂歌集歌の「無乏」を訓みつつ歌を学んだと考えられる歌が集中に少なからず見え、その動態を観察することが可能であるためである。

二　訓まれた人麻呂歌集歌

まずは右の問題を考えるためにも、「人麻呂歌集」が後の人々に確実に訓まれていたということの確認から本論をはじめることとしよう。この点に関しては既に松田浩（二〇一三）にて論じたことがあるが、その中の事例から本稿の課題に関わる二例を取り上げ、その要点を簡潔に確認しておくこととしたい。

まず、事例のひとつとして、人麻呂歌集歌の誤読によって生じた歌句が、巻十一・十二の作者未詳歌の中に見られる点を、「人麻呂歌集」訓読の痕跡として挙げることができる。

（a）隠沼（こもりぬの）　従裏恋者（したゆこふれば）　無乏（すべをなみ）　妹名告（いもがなのりつ）　忌物矣（ゆゆしきものを）

（11・二四四一・人麻呂歌集詩体歌）

（1）隠沼（こもりぬの）乃　下尓恋者（したにこふれば）　飽不足（あきだらず）　人尓語都（ひとにかたりつ）　可忌物乎（いむべきものを）

（11・二七一九）

（2）念西（おもひにし）　餘西鹿歯（あまりにしかば）　為便乎無美（すべをなみ）　吾者五十日手寸（われは）（いひてき）　応忌鬼尾（いむべきものを）

（12・二九四七）

（1）は第三句以外を、（2）は第三句以降を、ほぼ（a）に等しくするもので、両者が（a）に学んでものされたことが確実な例である。訓読という点を考える際に、この三首の間で注目すべきことは、（a）「忌物矣」が（1）（2）では「忌むべきものを」と承けられている点である。周知の如く総訓字表記を志向する人麻呂歌集詩体歌（略体歌）には、訓字で記すことが難しいやまとことばの助詞・助動詞が記されないという傾向がある。よって、その訓読の際には助詞・助動詞の補読が行われるが、人麻呂歌集歌には助動詞ベシを文字化しない歌は存在していない（稲岡耕二・二〇一一）。よって（a）「忌物矣」も「忌しきものを」と訓むべきものだが、その「忌」をイムと訓んだがために、音数が不足し助動詞ベシを補読して享受された結果が（1）（2）の結句「忌むべきものを」を生じさせている。

そして第二に、人麻呂歌集歌における文字の表現を承けつつ、その歌を改変することによって作成された歌にも、人麻呂歌集歌の訓みの痕跡を見ることができる。

（b）早敷哉不相子故（はしきやしあはぬこゆゑに）　徒（いたづらに）　是川瀬（しかはのせに）　裳襴潤（ころもぬらしつ）

（11・二四二九・人麻呂歌集詩体歌）

（3）愛八師（はしきやし）　不相君故（あはぬきみゆゑ）　徒尓（いたづらに）　此川瀬尓（しかはのせに）　玉裳沾津（たまもぬらしつ）

（11・二七〇五）

（3）は、男性が詠歌主体となっている（b）を、女性の立場

からの歌に改めたものである。（b）「是川」は、「是」字が「氏」字と音通で通用して用いられることを利用して「氏川」を「是川」と表記したものであり、「是」という意味もある「是」字を用いて「是川」と表記することによって、あたかも詠歌主体が「うぢかは」を眼前にしての感慨を歌っているかのような臨場表現が可能となっている（稲岡耕二・一九九一）。右の事例で注意しておきたいのは、（b）においては三十一文字の歌の姿には直接参与しない「是川＝このかは」という〈訓み〉がここに生起し、「是川＝うぢかは」という「訓み」に重ねられている点である。[1] そして（b）にあっては〈訓み〉であったはずの「是川」が、享受される中で「訓み」として文字化されて作られたのが、（3）「此川」であるということになる。

以上二例は、松田（二〇一三）に述べたところであるが、そこからは、人麻呂歌集の文字の歌を「訓む」という行為の中で、時に〈訓み〉によって、書記されて存するところのもとの歌の言葉のかたちとは異なる言葉が生起することを、そして、それが人麻呂歌集歌を享受して作られた歌の言葉へと、文字によって定着している様を見ることができる。

このような〈訓み〉の結果としての言葉の変化が訓読の痕跡を見せる歌々のほかに、特異な文字遣いの中に言葉のかたちをそのままに保存する「訓み」の存在が訓読の痕跡を見せる事例もある。

（4）（念ひにし余りにしかば）無乏　出行　家当見（12・二九四七・一云）

（5）念之　余者　為便無三　出曽行之　其門乎見尓（11・二五五一）

（4）は、「念西　余西鹿歯」に始まる（2）と第一・二句を共有する類歌として、その左注「一云」に掲載される歌である。（4）と（5）は、その結句において見ようとする対象がそれぞれ（4）「家が当たり」、（5）「其の門」であるという相違があるのみの小異歌の関係にある。（4）に見える「無乏」の文字列は、万葉集に四例を見るが、当該例のほかは全て人麻呂歌集詩体歌にのみ見える特徴的な文字遣いで、漢字の字義とは直接には対応しないスベナシという特殊な訓を持つ〈非対応訓〉の文字であり、それ故にこれを「訓む」ことは難しい。人麻呂歌集収載歌ではない（4）にその「無乏」の文字を使って「スベヲナミ」が記述されていることは、人麻呂歌集歌の「無乏＝スベナシ」が確かに訓まれ、その「訓み」が保存され、受容されていたことを物語っている。スベナシの訓字表記は当該の「無乏」四例を除き『万葉集』中に五六例を見るが、その五五例までがスベに「為便／便」を宛てるものである。[2] そうした中で、（4）のスベヲナミに人麻呂歌集詩体歌と同じ「無乏」の文字が使われたのは、意図的に人麻呂歌集の文字遣いを模倣したためであろう。第四・五句の「出でてそ行きし家が当たり見に」が「出行　家当見」と助詞・助動詞の表記を含まぬ人麻呂歌集詩体歌風の表記となっていることがその証左となる。人麻呂歌集の歌を学ぶにあたり、その歌の文字も含めて学んでいたということがここに垣間見える。

右に見てきたように、人麻呂歌集歌は文字によって訓まれ、学ばれていたことが明らかである。とはいえ、同じ「無乏」と

いう文字であり、訓としても同じスベナシという「訓み」を持つ（4）の「無乏」と人麻呂歌集の「無乏」との間には、〈訓み〉をめぐる看過できない相違がある。その問題を以下に論ずることとしたい。

三　「無乏」の〈意味〉とスベナシ

前節にも触れたとおり、「無乏」は、（a）を含む三首の人麻呂歌集歌、及び作者未詳歌の（4）に見られる。既に本稿に掲載してある用例はそれに譲り、残る人麻呂歌集歌二首を以下に示す。

（c）何時（いつはしも）　不戀時（こひぬときとは）　雖不有（あらねども）　夕方任（ゆふかたまけて）　恋無乏（こひはすべなし）

（11・二三七三・人麻呂歌集詩体歌）

（d）我妹（わぎもこに）　恋無乏（こひはすべなし）　夢見（いめみむと）　吾雖念（われはおもへど）　不所寐（いねらえなくに）

（11・二四一二・人麻呂歌集詩体歌）

集中の「無乏」は西本願寺本その他にスベナシ（スベナミ／スベヲナミ）と訓まれるものであり、諸注釈においてもこれに和語スベナシを宛てて「訓む」ことは定説となっている。しかし、「無乏」二字は文字通りに解すれば「乏」しきことが「無」いことを意味するものであり、そこにはスベナシ（方法がない・どうしようもない）に相当する意味はない。勿論、「乏」にスベ（方法）という訓（字義）が存するはずもなく、「無乏」二字をスベナシと訓むための文字の上での確実な根拠は存在しない。[3] そうでありながら、我々がそのように「訓め」るのは、既に「無乏」をスベナシと訓んできた古写本以来の歴史があり、そして「無乏」の二字をスベヲナミの表記として用いた（4）「無乏」が存在するからである。（4）の存在に拠って「無乏」がスベナシと「訓ま」れていた事実は確認しうるが、それはなぜ「無乏」がスベナシと訓めるのかという問題を解いてくれるものではない。

このような「無乏」が人麻呂歌集歌（a）（c）（d）において、なぜスベナシと訓み得るのかについて論じたのが柳澤朗（一九九〇）である。柳澤論文は「無乏」二字が把持する〈意味〉を示しつつ、そうした〈意味〉を持つ「無乏」が人麻呂歌集歌（a）（c）（d）の文脈の中においてスベナシと訓まれ得る可能性をさぐっている。すなわち、「無乏」は陸機「日出東南隅行」（『文選』巻二十八）の、洛水に遊ぶ貴婦人の美しさを述べる句に「綺態隨レ顔變、沈姿無レ乏源」とあり、そこでは女性の美しさ（沈姿）が「無乏」の源より湧き出るように限りがないと用いられている例に見るように、「なくなることがない・つきることがない」といった〈意味〉を示すものである。そしてその〈意味〉が（a）（c）（d）それぞれの固有の文脈の中で「その文脈と有機的に規制し合」うことによって、それぞれの歌の「無乏」がスベナシと訓まれ得るものとなるという。

柳澤論文が「無乏」の〈意味〉と一首の文脈との関連を述べる部分を（c）歌に限って以下に引用してみよう。

Aの歌〔＝（c）〕は言う、いつだって恋しく思わない時などないけれど、夕方になるとますます恋の思いは「すべなし」だと。この「すべなし」とは、夕方になって我が胸の内からつきることなく湧き上がってくる恋の奔流をおさえかねていることなのである。「夕方になると恋は（いよ

いよつのって）何ともいたしかたがない」（古典大系の大意）という思いが、この文脈における「無乏」という表記とその「なくなることがない・つきることがない」という〈意味〉に即して読み取られるようになっているわけである。

（柳澤・一九九〇、九二頁（〔　〕内、及び傍線・波線は引用者による）

傍線部で示した部分が「無乏」という文字が喚起する〈意味〉にあたる部分であり、波線部が和語「すべなし」の語義に拠って得られる解釈である。右引用中の『古典大系』の大意においては、「いよいよつのって」という「無乏」の〈意味〉が括弧に括られて示されており、「無乏」の訓スベナシの解釈が、直接の大意として示される。対して、柳澤論文では両者が連繋して「無乏（すべなし）」の解釈が行われる。「無乏」の担っている〈意味〉とスベナシの「訓」との重なるところに（c）「無乏（すべなし）」を捉えることは、文字の歌の表現を捉えるという意味でも正当であろう。

しかし、この点を認めた上でなお問題となるのは、（c）歌の文脈を「夕方になるとますます恋の思いは「すべなし」だ」と捉えるところから始まる解釈が、既に（c）「無乏」がスベナシの訓を持つということを前提としているという点である。

文字の歌という点から見れば、（c）「夕方任（ゆふかたまけて）　恋無乏（こひは）」が文字列として直接的に喚起するのは「夕方になると恋心がとめどなく湧き起こる」という〈意味〉である。『古典大系』では「いよいよつのって」が括弧で括られていたが、文字の側から見れば「無乏」の訓とされているスベナシこそが背後に隠れていることとなる。それが「訓」として立ち現れてくる文脈と「無乏」の〈意味〉との連関の説明が必要となる。

そうした「無乏」の〈意味〉とスベナシの訓との連繋は、（a）の文脈において最も明瞭になろう。（a）は、「寄物陳思」に分類された隠沼に寄せる思いを陳べた歌である。「隠沼」は、「去方無三（ゆくへなみ）　隠有小沼乃（こもれるをぬの）　下思尓（したもひに）…」（12・三〇二二）の例のあるごとく、流れ出てゆく出口の無い沼であり、「隠沼の」が比喩的枕詞として働き、思いを外に出さずに恋する心を象っている。そうして、下の句では、忌み憚られるものであるのに、恋人の名を口に出してしまったことが歌われるが、これを繋ぐ位置に置かれているのが「無乏」である。「無乏」がこの前後をいかに繋ぐかを確認しておこう。

心の内で外に漏れぬように恋をしていると、「無乏」となる。ここでの「無乏」の〈意味〉は、景においては〈水を外に流す出口の無い隠沼に尽きることなく水が湧き出てくる〉という像を結び、情においては〈心の内に秘めた恋心が次々に湧き出てくる〉ことをあらわす。そのような景と情とを「無乏」が示しつつ、これがとうとう秘めていた恋の相手の名前が口より出てしまったという第四句に接続する。結句に恋人の名を告げることは「忌しき」行為であると歌っているように、恋の思いを外に出さずに堪えていたのであるが、それでも尽きることなく湧き出る恋心はどうにもおさえることができなかったのである。

ここにはじめて、恋が「無乏〈意味＝つきることがない〉」という状態に即した文脈理解の中で、スベナシ「（その恋を）どうにもできない」という言葉が「無乏」の〈意味〉と下の句

とを繋ぐ言葉として顕在化する可能性を見ることができる。だが、それはあくまでも可能性として見出されるものであり、「無乏」をスベナシと「訓」む契機にまでは到ってはいない。右のスベナシは文字の歌を字に即して訓むという行為の中では、あくまでも解釈の中で読み取られる〈訓み〉の位相にある。このことは、(c)(d)においても同様であり、[4]人麻呂歌集のスベナシの〈訓み〉が「訓み」として三十一文字の歌の言葉の中で位置を占めるためにはまだなお階梯が必要となろう。

そして、ここで見逃せないのは、スベナシが未だ〈訓み〉の段階にあって「訓み」に到っていないという解釈の局面においては、「無乏」の〈意味〉もまた〈訓み〉の位置から「訓み」の位置へと移行する可能性を持っているということである。

四 〈訓み〉から「訓み」へ

前節に述べた〈訓み〉の問題を踏まえつつ、人麻呂歌集歌(a)を訓みつつ作成された(1)(2)の歌を再び見てみることとしよう。

(1) 隠沼乃 下尓恋者 飽不足 人尓語都 可忌物乎 (11・二七一九)

(2) 念西 餘西鹿歯 為便乎無美 吾者五十日手寸 応忌鬼尾 (12・二九四七)

(1)の「飽き足らず」は(a)「無乏」の「訓」であるところのスベナシと関わるところがない。「飽き足る」は、満ち足りることであり、『万葉集』の歌々の中では打消を伴って

(6) 草枕旅行く君を荒津まで送りぞ来ぬる飽き足らねこそ (飽不足社) (13・三二一六)

(7) 年月は新た新たに相見れど我が思ふ君は飽き足らぬかも (安伎太良奴可母) (20・四二九九)

に見るように、対象を求める心が尽きることなく湧き上がることを表現する言葉である。[5]すなわち、(1)は(a)「無乏」の〈意味〉を恋心が止まずに湧き出る状態として〈訓む〉ことによって、「飽き足らず」のことばを得た結果の現れであろう。だが、それによって、秘めた恋情を口に出してしまったという情を形象するはずの景「隠沼」は「飽き足ら」ぬ状態、溢れぬ状態として示されてしまうこととなる。(1)が寄物陳思歌でありながら、景と情との間にずれを生じさせているのは、景と情との関係から発想されたものではなく、(a)「無乏」を苦心しつつもどうにかして〈訓む〉という行為の中で作られたものであるからであろう。

一方の(2)は、正述心緒歌であり、「隠沼」は詠み込まれない。ここでは、(a)「無乏」はスベヲナミの「訓」を以て享受されているが、その表記は「為便乎無美」であって、そこには「とめどなく湧き出る」という〈意味〉はない。その上で一・二句に「念ひにし余りにしかば」の句が置かれるのである。「余り」は「物事の分量や程度が一定の枠の中におさまりきらず、外にはみ出る」意を持つ語である(岩波古語辞典)。つまり(2)は上二句で、恋がとめどなく湧き出てしまった結果を読み込みつつ、(a)「無乏」のスベナシという「訓」のみを歌のことばの上に顕在化させているのである。

右の(1)(2)の他にも、『万葉集』中には人麻呂歌集歌(a)

の表現を承けてものされた歌を見ることができる。[6]

（8）隠沼乃　下従戀餘　白浪之　灼然出　人之可知
（12・三〇一三）

右は（a）と等しく恋情を外に出さぬ心を「隠沼」によって象りつつ表現する寄物陳思歌であるが、そこにスベナシの語は見られず、一見したところでは、（a）の上二句のみを学んだようにも見える。しかし、（8）では「無乏」を持たぬ代わりに「下ゆ恋ひ余り」の句が第三句以降の恋情の露見を導いている。ここでの「恋ひ余り」は、景としては隠沼から水が、情としては心の内より恋情が、溢れ出てしまったことを表現しているが、その発想を支えているのは、（2）の場合と同様に（a）の「無乏」の〈意味〉が持つ表現性であろう。言わば、（a）「無乏」の〈意味〉に対する〈訓み〉が「恋ひ余り」という表現を生み出しているのである。

右のように〈訓み〉が次の歌の言葉を生み出すことを確かめた上で、「無乏」の文字遣いによってスベナシを表す作者未詳歌（4）を再び見てみることとしたい。

（4）（念ひにし余りにしかば）無乏　出行　家当見
（12・二九四七・一云）

右では確かに「無乏」が和語「すべをなみ」を表す文字として記されており、第四・五句の表記のありようもまた人麻呂歌集詩体歌を模したものであった。しかし、ここで（4）の「無乏」をその〈意味〉を踏まえつつ文脈の中で捉えることができないことは明らかである。（4）の上句では、「念ひにし余」ることが述べられるが、これを順接確定の条件句として「無乏」以下の句が並ぶこととなる。つまり（4）は既に溢れてしまった「念ひ」をどうにも処理できずに（スベヲナミ）、ついには恋人の家の辺りを見に出かけてしったのであり、ここに「無乏」の〈意味〉を見ようとすれば、それは屋上屋を架すこととなる。

すなわち、（4）「無乏」は、人麻呂歌集歌「無乏」に学びつつも、そこから受容されたのは「無乏」に与えられた「訓」としてのスベナシのみであったということである。言うなれば、（4）「無乏」はスベナシの表語性をのみ把持しているのであって、そこには人麻呂歌集歌の「無乏」の〈意味〉と一首の文脈の解釈からスベナシを顕在化させるというプロセスを学び身につけた形跡は見られない。ここからは人麻呂歌集の文字列を目の前にしながら、その「訓」を学ぶといった、歌学びの場が見えてくることとなろう。

このように人麻呂歌集歌（a）「無乏」への様々な〈訓み〉とその結果作られた歌における「訓み」との諸相を見ると、そこには、様々な水準で歌集の文字列を訓み、学ぶという行為があったであろうことが想定できる。（1）や（8）に見えるような、「訓」の見えぬ文字列に対して文字の〈意味〉を〈訓〉んで学ぶことで、あるいは（2）のように「訓」と〈意味〉とを〈訓み〉つつ学ぶことで、また更には（4）のように文字列と「訓」との結びつきを学ぶことで、歌を作るというそれぞれの行為の痕跡が、それらの文字遣いと歌表現から見えて来ることとなる。

本稿に課せられた「〈音〉を書く」という問題は、『万葉集』においては、書物の文字列を言葉として訓み、そこに三十一文字の音韻連鎖を見出すこと、そして更に、それを書記すること

で文字列の上に定着させるという行為のただ中にあるものとして見えてくることとなる。そしてそれは、右に見るような様々な水準であり得た文字の歌における歌学びの場の、それぞれの具体的な場に即して捉えられるべきものということとなろう。本稿は、そうした場の痕跡を文字列の上に見てきた次第である。

注（1）　ここでの「訓み」は、訓読によって得られる三十一文字のことばのかたちを形成することに参与する訓みのことを指している。声に出して読むときの音韻連鎖に参与する「訓み」と言ってもよい。〈訓み〉との対比を明確にするためにカギ括弧を付した。

（2）　五六例には「すべもなし」や「すべをなみ」といった用例も含む。「為便／便」以外の一例は「窮見（すべなみ）（13・三三五七）」。

（3）　澤瀉久孝（一九五一）は、巻九・一七〇二番歌の「及乏」をスベナキマデニと訓み、従来トモシと訓まれてきた「乏」をスベナシと訓む説を唱えた上で、それに「無」のついた「無乏」をもスベナシと訓むが、柳澤朗（一九九〇）によって「乏」がスベナシとは訓み得ずトモシであること、および仮名ムの用例以外の「無」において下接の文字（語）を打消す意味を持たない用法があり得ないことが指摘されており、澤瀉説の「乏＝スベナシ＝無乏」の説が成り立たないことが論ぜられている。

（4）　（d）の場合、文字の側から見れば「恋しさが募ってくるので、〈その恋心をどうすることもできず、せめて、〉夢で相手を見ようというのであり、〈スベナシ〉はあくまでも解釈の上で示された〈訓み〉の位相を越えていない。（c）の場合では、恋心が募ってくることに対する情の理解として〈スベナシ〉が想起しうるのであって、これもまた同様である。

（5）　紙幅の都合上、その他の「飽き足る」の用例は歌番号のみ示す。5・八三六、6・九三一、10・二〇〇九・二〇二一、13・三三二六、19・四一六六・四一八七。

（6）　用例として挙げた（8）の他、巻十二・三〇二一番歌、巻十七・三九三五番歌があるが、前者は（8）を承けて成った歌であり、後者は（8）の同一歌であるため、ここでは省略する。

【引用論文】

稲岡耕二（一九八九）「人麻呂歌集古体歌の〈非対応訓〉について—惻隠・心哀・無乏など—」『論集上代文学』第十七冊・笠間書院
稲岡耕二（一九九一）「漢字で歌う工夫」『人麻呂の表現世界—古体歌から新体歌へ—』岩波書店
稲岡耕二（二〇一一）「漢文訓読と人麻呂歌集」『人麻呂の工房』塙書房
澤瀉久孝（一九五一）「人麻呂訓詁二題」『国語国文』第二〇巻一号、（『万葉歌人の誕生』（平凡社、一九五六）所収）
松田浩（二〇一三）「漢字で書かれた歌集—「人麻呂歌集」の書記と「訓み」と—」『古代文学』52号
柳澤朗（一九九〇）「無乏と乏—人麻呂歌集五首の訓の根拠とその表記の性質—」『日本上代文学論集』塙書房